

感染症発生動向調査情報に基づく埼玉県の患者発生状況

-2014年-

尾関由姫恵 山田文也 白石薫子*1 山田さゆり 細野真弓 中村政彦*2 岸本剛

Infectious disease surveillance reports in Saitama Pref. in 2014

Yukie Ozeki, Fumiya Yamada, Kaoruko Shiraishi, Sayuri Yamada, Mayumi Hosono, Masahiko Nakamura, Tsuyoshi Kishimoto

はじめに

感染症発生動向調査事業は、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（感染症法）」の第12条から第16条に基づく全国サーベイランスで、一類から五類感染症、新感染症、指定感染症及び新型インフルエンザ等感染症の患者を診断した医師から届出を受け、感染症の地域的な流行の実態を早期かつ的確に把握し、その情報を速やかに地域に還元するものである。当所では、2004年4月から「感染症発生動向調査実施要綱」に基づく埼玉県感染症情報センターとして、埼玉県における感染症の発生についての情報収集、解析及び提供を行っている。

2014年のサーベイランスでは、9月9日に通知された「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律施行規則の一部を改正する省令の施行等について（健発 0909 第1号）」により、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症及び播種性クリプトコックス症が五類感染症の全数把握対象疾患へ追加された。さらに、小児科定点把握対象疾患の水痘に加え水痘（患者が入院を要すると認められるものに限る）が五類全数把握対象疾患へ追加され、基幹定点報告対象疾患の薬剤耐性アシネトバクター感染症が五類全数把握対象疾患へ移行された。追加された疾患はいずれも9月19日から届出の対象となった。

また、11月21日に通知された「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律の一部を改正する法律について（健発 1121 第3号）」の一部が同日施行されたことにより、獣医師の届出の対象から、実験のために届出の対象である感染症に感染させられている場合を除くこととなった。

本報告では、全数把握対象疾患及び定点把握対象疾患として報告されたものを集計対象とし、埼玉県基幹情報センターとしてさいたま市及び川越市を含む全域域から収集した届出をまとめた。

対象及び方法

届出対象疾患を表 1-1, 2 に示す。対象疾患の集計は、NESID システム内の感染症発生動向調査システムの数値を用いた。集計は、全数把握対象疾患と月単位報告の定点把

握対象疾患が診断日 2014 年 1 月 1 日から 12 月 31 日まで、週単位報告の定点把握対象疾患が 2013 年 12 月 30 日（第 1 週）から 2014 年 12 月 28 日（第 52 週）までの報告を対象とした。

結果

1. 全数把握対象疾患の発生状況

一類から三類感染症の届出数を表 2-1 に、四類感染症を表 2-2 に、五類全数把握対象疾患を表 2-3 にそれぞれ示した。

(1) 一類から三類感染症

一類感染症は、疑似症を含め届出はなかった。二類感染症は、結核 1,390 例の届出があり、前年の 1,315 例より 75 例増加した。病型別では、患者 931 例、無症状病原体保有者（潜在性結核感染症）435 例、疑似症 23 例、感染症死亡者の死体 1 例であった。患者は届出の 67.0% を占め、前年の 71.9% より 4.9 ポイント減少した。

三類感染症は、細菌性赤痢 2 例、腸管出血性大腸菌感染症 265 例、腸チフス 2 例、パラチフス 1 例の届出があり、腸管出血性大腸菌感染症の届出数は、前年に引き続き増加した。また、前年に引き続きコレラの届出はなかった。

1) 細菌性赤痢

細菌性赤痢は、40 歳代と 70 歳代の男 2 例の届出があった。病型別では患者 2 例で、いずれも診断方法は分離・同定による病原体の検出、血清群は D 群であった。届出は 5 月と 11 月で、推定感染地域はいずれも国外であった。

2) 腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症は、男 111 例、女 154 例の計 265 例の届出があった。年齢階級別では、10 歳未満から 90 歳以上に分布し、10 歳未満が 93 例と最も多く、届出の 35.1% を占めた。男女比は、0.7:1 で、10 歳未満、90 歳以上を除く年齢階級で女の届出が男を上回った。病型別では、患者 206 例、無症状病原体保有者 59 例で、無症状病原体保有者が全体の 22.3% を占めた。届出は全ての月にあり、月別では 8 月の 89 例が最も多く、次いで 7 月の 63 例、6 月の 55 例の順であった。また、HUS 患者は 10 歳未満の男 4 例、女 6

*1 現 狭山保健所、*2 現 川口保健所

例の計10例であった。血清型別では、血清型0157が226例と最も多く全体の85.3%を占め、その割合は前年(62.3%)より増加した。次いで、026の19例で、その他の

血清型の検出は散発的で、0103が3例、0163、0121が各2例、0168、0145、0127、0111、091、08、05が各1例の他、血清型不明が6例であった。

表 1-1 感染症法における届出対象疾患

感染症類型	疾患名	届出の可否			届出方法		
		患者	(*) 疑似症	無症状病原 体保有者	定点種 別	時期	内容 (**)
一類	エボラ出血熱	○	○	○	(全数)	直ちに	a
	クリミア・コンゴ出血熱	○	○	○	(全数)	直ちに	a
	痘そう	○	○	○	(全数)	直ちに	a
	南米出血熱	○	○	○	(全数)	直ちに	a
	ペスト	○	○	○	(全数)	直ちに	a
	マールブルグ病	○	○	○	(全数)	直ちに	a
二類	ラッサ熱	○	○	○	(全数)	直ちに	a
	急性灰白髄炎	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	結核	○	○	○	(全数)	直ちに	a
	ジフテリア	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	重症急性呼吸器症候群(病原体がSARSコロナウイルスであるものに限る)	○	○	○	(全数)	直ちに	a
三類	鳥インフルエンザ(H5N1)	○	○	○	(全数)	直ちに	a
	コレラ	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	細菌性赤痢	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	腸管出血性大腸菌感染症	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	腸チフス	○	×	○	(全数)	直ちに	a
四類	パラチフス	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	E型肝炎	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	ウエストナイル熱(ウエストナイル脳炎を含む)	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	A型肝炎	○	×	○	(全数)	直ちに	a
五類	エキノコックス症	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	黄熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	オウム病	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	オムスク出血熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	回帰熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	キャサスル森林病	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	Q熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	狂犬病	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	コクシジオイデス症	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	サル痘	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	重症熱性血小板減少症候群	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	腎症候性出血熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	西部ウマ脳炎	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	ダニ媒介性脳炎	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	炭疽	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	チクングニア熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	つつが虫病	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	デング熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	東部ウマ脳炎	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	鳥インフルエンザ(H5N1及びH7N9を除く)	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	ニパウイルス感染症	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	日本紅斑熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	日本脳炎	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	ハンタウイルス肺症候群	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	ロウイルス病	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	鼻疽	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	ブルセラ症	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	ベネズエラウマ脳炎	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	ヘンドラウイルス感染症	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	発しんチフス	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	ボツリヌス症	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	マラリア	○	×	○	(全数)	直ちに	a
野兔病	○	×	○	(全数)	直ちに	a	
ライム病	○	×	○	(全数)	直ちに	a	
リッサウイルス感染症	○	×	○	(全数)	直ちに	a	
リフトバレー熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a	
類鼻疽	○	×	○	(全数)	直ちに	a	
レジオネラ症	○	×	○	(全数)	直ちに	a	
レプトスピラ症	○	×	○	(全数)	直ちに	a	
ロッキー山紅斑熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a	
指定感染症	鳥インフルエンザ(H7N9)	○	○	○	** * d	直ちに	a
	中東呼吸器症候群(病原体がベータコロナウイルス属MERSコロナウイルスであるものに限る)	○	○	×	(全数)	直ちに	a

*疑似症 : 疑似症とは、明らかに当該感染症の症状を有しているが、病原体診断の結果が未定の者を指す

**内容 : a : 氏名、年齢、性別、職業、住所、所在地、病名、症状、診断方法、初診・診断・推定感染年月日、感染原因、感染経路、感染地域、その他(保護者の住所氏名)

b : 年齢、性別、病名、症状、診断方法、初診・診断・推定感染年月日、感染原因、感染経路、感染地域

c1 : 年齢、性別 c2 : 年齢、性別、原因病原体の名称、検査方法

*** : 集団的な発生が疑われる場合のみ届出

d : 患者の属する施設の名称及び所在地、患者から聴取した疫学情報

推定感染地域は国内と国外が各1例であった。

3) 腸チフス

腸チフスは、50歳代男と10歳代男の計2例の届出があった。病型別では患者2例で、診断方法はいずれも分離・同定による病原体の検出であった。届出は9月に2例で、

3) パラチフス

パラチフスは、50歳代の男1例の届出があった。病型は患者で、診断方法は分離・同定による病原体の検出であつた。

表 1-2 感染症法における届出対象疾患

感染症類型	疾患名	届出の可否			届出方法		
		患者	(*) 疑似症	無症状病原 体保有者	定点種別	時期	内容 (**)
五	アメーバ赤痢	○	×	×	(全数)	7日以内	b
	RSウイルス感染症	○	×	×	小児科	次の月曜	c1
	咽頭結膜熱	○	×	×	小児科	次の月曜	c1
	インフルエンザ(鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く)	○	×	×	内科 小児科	次の月曜	c1
	ウイルス性肝炎(E型肝炎及びA型肝炎を除く)	○	×	×	(全数)	7日以内	b
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	○	×	×	小児科	次の月曜	c1
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症★	○	×	×	(全数)	7日以内	b
	感染性胃腸炎	○	×	×	小児科	次の月曜	c1
	感染性胃腸炎(病原体がロタウイルスであるものに限る)	○	×	×	基幹	次の月曜	c2
	急性出血性結膜炎	○	×	×	眼科	次の月曜	c1
	急性脳炎 (ウエストナイル脳炎、西部ウマ脳炎、ダニ媒介性脳炎、東部ウマ脳炎、日本脳炎、ベネズエラ馬脳炎及びリストバレー熱を除く)	○	×	×	(全数)	7日以内	b
	クラミジア肺炎(オウム病を除く)	○	×	×	基幹	次の月曜	c2
	クリプトスポリジウム症	○	×	×	(全数)	7日以内	b
	クロイツフェルト・ヤコブ病	○	×	×	(全数)	7日以内	b
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	○	×	×	(全数)	7日以内	b
後天性免疫不全症候群	○	×	○	(全数)	7日以内	b	
細菌性髄膜炎(髄膜炎菌、肺炎球菌、インフルエンザ菌を原因として同定された場合を除く)	○	×	×	基幹	次の月曜	c2	
侵襲性インフルエンザ菌感染症	○	×	×	(全数)	7日以内	b	
侵襲性肺炎球菌感染症	○	×	×	(全数)	7日以内	b	
侵襲性髄膜炎菌感染症	○	×	×	(全数)	7日以内	b	
ジアルジア症	○	×	×	(全数)	7日以内	b	
水痘	○	×	×	小児科	次の月曜	c1	
水痘(入院例)★	○	×	×	(全数)	7日以内	b	
性器クラミジア感染症	○	×	×	STD	翌月初日	c1	
性器ヘルペスウイルス感染症	○	×	×	STD	翌月初日	c1	
尖圭コンジローマ	○	×	×	STD	翌月初日	c1	
先天性風しん症候群	○	×	×	(全数)	7日以内	b	
手足口病	○	×	×	小児科	次の月曜	c1	
伝染性紅斑	○	×	×	小児科	次の月曜	c1	
突発性発しん	○	×	×	小児科	次の月曜	c1	
梅毒	○	×	○	(全数)	7日以内	b	
播種性クリプトコックス症★	○	×	×	(全数)	7日以内	b	
破傷風	○	×	×	(全数)	7日以内	b	
バンコマイシン耐性 黄色ブドウ球菌感染症	○	×	×	(全数)	7日以内	b	
バンコマイシン耐性 腸球菌感染症	○	×	×	(全数)	7日以内	b	
百日咳	○	×	×	小児科	次の月曜	c1	
風しん	○	×	×	(全数)	7日以内	b	
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	○	×	×	基幹	翌月初日	c2	
ヘルパンギーナ	○	×	×	小児科	次の月曜	c1	
マイコプラズマ肺炎	○	×	×	基幹	次の月曜	c2	
麻しん	○	×	×	(全数)	7日以内	b	
無菌性髄膜炎	○	×	×	基幹	次の月曜	c2	
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	○	×	×	基幹	翌月初日	c2	
薬剤耐性アシネトバクター感染症★★	○	×	×	(全数)	7日以内	b	
薬剤耐性緑膿菌感染症	○	×	×	基幹	翌月初日	c2	
流行性角結膜炎	○	×	×	眼科	次の月曜	c1	
流行性耳下腺炎	○	×	×	小児科	次の月曜	c1	
淋菌感染症	○	×	×	STD	翌月初日	c1	

*疑似症： 疑似症とは、明らかに当該感染症の症状を有しているが、病原体診断の結果が未定の者を指す
 **内容： a： 氏名、年齢、性別、職業、住所、所在地、病名、症状、診断方法、初診・診断・推定感染年月日、感染原因、感染経路、感染地域その他(保護者の住所氏名)
 b： 年齢、性別、病名、症状、診断方法、初診・診断・推定感染年月日、感染原因、感染経路、感染地域
 c1： 年齢、性別 c2： 年齢、性別、原因病原体の名称、検査方法

★9月19日から届出対象

★★9月18日までは基幹定点からの月報告、9月19日からは全数報告に移行

表2-1 一類、二類、三類感染症の届出数

	疾患名	埼玉県		
		2014年	2013年	2012年
一類	エボラ出血熱	0	0	0
	クリミア・コンゴ出血熱	0	0	0
	痘そう	0	0	0
	南米出血熱	0	0	0
	ペスト	0	0	0
	マールブルグ病	0	0	0
	ラッサ熱	0	0	0
二類	急性灰白髄炎	0	0	0
	結核	1390	1315	1412
	ジフテリア	0	0	0
	重症急性呼吸器症候群	0	0	0
	鳥インフルエンザ(H5N1)	0	0	0
三類	コレラ	0	0	0
	細菌性赤痢	2	4	12
	腸管出血性大腸菌感染症	265	191	130
	腸チフス	2	5	1
	パラチフス	1	1	1

た。届出は5月で、推定感染地域は国外であった。

(2) 四類感染症

四類感染症は、E型肝炎12例、A型肝炎8例、つつが虫病1例、デング熱14例、ブルセラ症1例、マラリア3例、ライム病1例、レジオネラ症55例の計95例の届出があった。

1) E型肝炎

E型肝炎は、男9例、女3例の計12例の届出があり、前年の7例より増加した。性年齢階級別では、男が60歳代4例、50歳代3例、40歳代及び70歳代各1例、女は40歳代2例、70歳代1例であった。届出は散発的で、患者間の関連性は認められなかった。病型別では、患者11例、無症状病原体保有者1例で、診断方法は血清IgA抗体の検出9例、血清IgA抗体の検出及びPCR法による病原体遺伝子の検出

が1例、血清IgM抗体の検出1例、血清IgA抗体と血清IgM抗体の検出及びPCR法による病原体遺伝子の検出が1例であった。推定感染地域はいずれも国内であった。

2) A型肝炎

A型肝炎は、男4例、女4例の計8例の届出があり、前年の4例より増加した。性年齢階級別では、男が20歳代2例、40歳代と50歳代各1例、女は50歳代2例、20歳代と80歳代各1例であった。届出は、1月と2月に各2例、4月、5月、6月、10月に各1例と散発的で患者間の関連性は認められなかった。診断方法は血清IgM抗体の検出7例、PCR法による病原体遺伝子の検出1例で、推定感染地域は国外3例、国内5例であった。

3) つつが虫病

つつが虫病は、11月に50歳代女1例の届出があった。診断方法は、分離・同定による病原体の検出、間接蛍光抗体法又は間接免疫ペルオキシダーゼ法による血清抗体の検出及びIgM抗体の検出であった。感染経路感染地域は、居住住宅の庭での作業中の感染が推定された。

4) デング熱

デング熱は、男10例、女4例の計14例の届出があり、前年の7例より増加した。性年齢階級別では、男が30歳代、40歳代が各3例、50歳代2例、10歳代、60歳代が各1例、女は10歳代、20歳代が各2例であった。病型別では、全例がデング熱で、デング出血熱の届出はなかった。診断方法は、血清IgM抗体の検出が4例、PCR法による病原体の検出が8例、NS1抗原の検出が7例で、5例は複数の検査方法により診断されていた。推定感染地域は、4例が国外、10例が国内感染例であった。国内の推定感染地域はいずれも県外で、8月から9月にかけて届出された。

表 2-2 四類感染症の届出数

	疾患名	埼玉県			疾患名	埼玉県		
		2014年	2013年	2012年		2014年	2013年	2012年
四類	E型肝炎	12	7	0	鳥インフルエンザ(H5N1を除く)	0	0	0
	ウエストナイル熱	0	0	0	ニパウイルス感染症	0	0	0
	A型肝炎	8	4	3	日本紅斑熱	0	0	0
	エキノコックス症	0	0	0	日本脳炎	0	0	0
	黄熱	0	0	0	ハンタウイルス肺症候群	0	0	0
	オウム病	0	0	0	Bウイルス病	0	0	0
	オムスク出血熱	0	0	0	鼻疽	0	0	0
	回帰熱	0	0	0	ブルセラ症	1	0	0
	キャサナル森林病	0	0	0	ベネズエラウマ脳炎	0	0	0
	Q熱	0	0	0	ヘンドラウイルス感染症	0	0	0
	狂犬病	0	0	0	発しんチフス	0	0	0
	コクシジオイデス症	0	0	0	ボツリヌス症	0	0	0
	サル痘	0	0	0	マラリア	3	1	9
	腎症候性出血熱	0	0	0	野兔病	0	0	0
	西部ウマ脳炎	0	0	0	ライム病	1	0	0
	ダニ媒介性脳炎	0	0	0	リッサウイルス感染症	0	0	0
	炭疽	0	0	0	リフトバレー熱	0	0	0
	チクングニア熱	0	0	0	類鼻疽	0	1	0
	つつが虫病	1	0	2	レジオネラ症	55	42	57
	デング熱	14	7	5	レプトスピラ症	0	0	1
	東部ウマ脳炎	0	0	0	ロッキー山紅斑熱	0	0	0

5) ブルセラ症

ブルセラ症は、40歳代男1例の届出があった。診断方法は、試験管凝集反応による血清抗体の検出であり、推定感染地域は国内であった。

6) マラリア

マラリアは、3例の届出があり前年の1例より増加した。性年齢階級別では、10歳代男、30歳代男、及び40歳代女であった。病型は三日熱、熱帯熱、卵形が各1例で、診断方法はいずれも血液検体の鏡検による病原体の検出であった。推定感染地域はいずれも国外であった。

7) ライム病

ライム病は、9月に60歳代女1例の届出があった。診断方法は、検体(紅斑部の皮膚)から直接のPCR法による病原体遺伝子の検出及びウエスタンブロット法による血清抗体の検出であった。推定感染地域は国内であった。

8) レジオネラ症

レジオネラ症は、男43例、女12例の計55例の届出があり、前年の42例より増加した。性年齢階級別では、男では30歳代1例、50歳代8例、60歳代16例、70歳代11例、80歳代5例、90歳代2例、女では40歳代1例、50歳代1例、60歳代3例、70歳代1例、80歳代3例、90歳代3例の届出があった。年間を通して届出があり、月別の届出数は5月と6月の各7例が最も多かった。病型別では、肺炎型51例、ポンティアック熱型4例で、無症状病原体保有者の届出はなかった。診断方法は、酵素抗体法またはイムノクロマト法による尿中抗原の検出が53例、分離同定による病原体の検出、蛍光抗体法による病原体抗原の検出、検体から直接のPCR法による病原体遺伝子の検出が各1例であった。推定感染地域は、国内52例、国外2例、不明1例で、国内感染例のうち県内は40例であった。

(3) 五類感染症

五類感染症の全数把握対象疾患は、アメーバ赤痢41例、ウイルス性肝炎(E型・A型を除く)11例、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症3例、急性脳炎27例、クリプトスポリジウム症1例、クロイツフェルト・ヤコブ病6例、劇症型溶血性レンサ球菌感染症10例、後天性免疫不全症候群45例、ジアルジア症1例、侵襲性インフルエンザ菌感染症10例、侵襲性髄膜炎菌感染症2例、侵襲性肺炎球菌感染症75例、水痘(入院例)3例、梅毒51例、播種性クリプトコックス症4例、破傷風5例、バンコマイシン耐性腸球菌感染症6例、風しん9例、麻しん27例、薬剤耐性アシネトバクター感染症2例の計339例であった。

1) アメーバ赤痢

アメーバ赤痢は、男34例、女7例の計41例の届出があ

り、前年の39例より増加した。性年齢階級別では、男で50歳代の12例が最も多く、30歳代から80歳代に分布していた。女は30歳代の4例が最も多かった。年間を通して届出があり、9月の6例が最も多く、12月を除く各月に複数の届出があった。病型別では、腸管アメーバ症35例、腸管外アメーバ症3例、腸管及び腸管外アメーバ症3例であった。診断方法は、腸管アメーバ症で鏡検による病原体の検出34例、血清抗体の検出6例であった。腸管外アメーバ症は、鏡検による病原体の検出1例、血清抗体の検出2例、腸管及び腸管外アメーバ症では、鏡検による病原体の検出が2例、血清抗体の検出が1例であった。推定感染経路は、経口感染7例、性的接触11例、その他3例、不明20例であった。性的接触の内訳は異性間性的接触9例、異性同性不明例2例であった。推定感染地域は、国内30例、国外4例、国内又は国外2例、不明5例であった。

2) ウイルス性肝炎(E型・A型を除く)

ウイルス性肝炎(E型・A型を除く)は、男7例、女4例の届出があり、前年の6例より増加した。性年齢階級別では、男が20歳代1例、30歳代1例、40歳代5例、女が30歳代2例、40歳代1例、60歳代1例であった。届出は、9月、12月に各3例、4月2例、1月、5月、8月に各1例であった。病型別ではB型肝炎が9例で、C型肝炎とその他ウイルス性肝炎(サイトメガロウイルス肝炎)が各1例であった。診断方法は、B型肝炎の全例が血清IgM抗体(HBc抗体)の検出、C型肝炎がペー血清でのHCV抗体の検出、サイトメガロウイルス肝炎が血清IgM(CMV抗体)の検出であった。推定感染経路は、B型肝炎が性的接触7例(異性間4例、異性同性不明3例)、不明2例、C型肝炎が異性間性的接触、サイトメガロウイルス肝炎が同性間性的接触であった。また、推定感染地域は全例が国内であった。

表 2-3 五類感染症の届出数(全数把握)

	疾患名	埼玉県		
		2014年	2013年	2012年
五類	アメーバ赤痢	41	39	45
	ウイルス性肝炎(E型・A型を除く)	11	6	9
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症★	3	-	-
	急性脳炎	27	33	18
	クリプトスポリジウム症	1	0	0
	クロイツフェルト・ヤコブ病	6	10	8
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	10	6	8
	後天性免疫不全症候群	45	43	42
	ジアルジア症	1	2	3
	侵襲性インフルエンザ菌感染症★★	10	2	-
	侵襲性髄膜炎菌感染症★★	2	1	-
	侵襲性肺炎球菌感染症★★	75	44	-
	水痘(入院例)★	3	-	-
	先天性風しん症候群	0	3	1
	梅毒	51	39	31
	播種性クリプトコックス症★	4	-	-
	破傷風	5	4	5
	バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症	0	0	0
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	6	8	7
	風しん	9	608	97
麻しん	27	26	28	
薬剤耐性アシネトバクター感染症★	2	-	-	

★ カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症、水痘(入院例)、播種性クリプトコックス症および薬剤耐性アシネトバクター感染症は2014年9月19日から届出の対象
 ★★ 侵襲性髄膜炎菌感染症、侵襲性肺炎球菌感染症および侵襲性インフルエンザ菌感染症は2013年4月1日から届出の対象

3) カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症

9月19日から届出対象となったカルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症は、11月に3例の届出があった。性年齢階級別では、男が10歳未満と70歳代、女が80歳代であった。診断方法はいずれも通常無菌的でない検体からの分離同定による病原体の検出であった。

4) 急性脳炎

急性脳炎は、男17例、女10例の計27例の届出があった。性年齢階級別では、男で10歳未満が11例と最も多く、30歳代、70歳代が各2例、60歳代、80歳代各1例であった。女では10歳未満8例、10歳代2例であった。届出は5月と10月を除く各月にあり、検出された病原体では、ヘルペスウイルス7例、インフルエンザウイルス6例が多く、インフルエンザウイルスは1〜3月と12月に検出された。その他にロタウイルスが3月に2例、RSウイルス、パレコウイルスが各1例から検出され、病原体不明は10例であった。推定感染地域は、国内が25例、不明が2例であった。

5) クリプトスポリジウム症

クリプトスポリジウム症は、20歳代男1例の届出があった。診断方法は、便の鏡検による病原体の検出であり、推定される感染経路は牛との接触で、推定感染地域は国内であった。

6) クロイツフェルト・ヤコブ病(CJD)

CJDは、男5例、女1例の計6例の届出があった。性年齢階級別では、男で80歳代2例、50歳代、60歳代、70歳代各1例、女は70歳代であった。病型別では、いずれも古典型CJDで、他の届出はなかった。診断の確実度では、ほぼ確実が5例、疑い(脳波に周期性同期性放電(PSD)を認めない)が1例であった。

7) 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、男4例、女6例の計10例の届出があり、前年の6例より増加した。性年齢階級別では、男で30歳代、60歳代、70歳代、80歳代が各1例、女は40歳代が2例、20歳代、50歳代、60歳代、70歳代が各1例であった。診断方法は全例が分離同定による病原体の検出で、血清群は、A群が8例、G群が2例であった。推定される感染経路は、創傷感染、飛沫感染が各1例、不明8例で、推定感染地域は全例が国内であった。

8) 後天性免疫不全症候群(AIDS)

AIDSは、男43例、女2例の計45例の届出があり、前年の43例より増加した。性年齢階級別では、男で30歳代が15例と最も多く、次いで20歳代、40歳代各10例で、10歳代から70歳代に分布した。女は20歳代と40歳代が各1例であった。病型別では、AIDS患者(AIDS指標疾患発症者)

が23例、無症状病原体保有者が18例、その他(AIDS指標疾患以外の発症者)が4例であった。届出は年間を通してあり、7月を除く各月に複数の届出があった。推定される感染経路では、性的接触が39例、性的接触以外では静注薬物使用が1例、不明が5例であった。また、性的接触の内訳は、異性間が男5例、女2例の計7例、同性間が男28例、異性・同性間が男3例、異性・同性不明が男1例であった。

9) ジアルジア症

ジアルジア症は、10月に50歳代男1例の届出があった。診断方法は鏡検による病原体の検出で、推定感染地域は国内で、推定感染経路は不明であった。

10) 侵襲性インフルエンザ菌感染症

侵襲性インフルエンザ菌感染症は、男5例、女5例の計10例の届出があった。診断方法は、全例で分離同定による病原体の検出が行われていたほか、3例でPCR法による病原体遺伝子の検出も行われていた。推定感染地域はいずれも国内であった。また、ヒブワクチン接種歴は、有り2例、無し2例、不明6例であった。

11) 侵襲性髄膜炎菌感染症

侵襲性髄膜炎菌感染症は、1月に20歳代男、12月に40歳代男の計2例の届出があった。病型は1月の届出が感染症死亡者の死体、12月は患者であった。診断方法は、分離同定による病原体の検出(検体は、血液、脳組織が各1例)で、いずれも血清群不明(未実施)であった。推定感染地域は国内1例、不明1例であった。

12) 侵襲性肺炎球菌感染症

侵襲性肺炎球菌感染症は、男51例、女24例の計75例の届出があった。診断方法では、全例で分離同定による病原体の検出が実施されていた。侵襲性を示す症状では、菌血症が最も多く56例で肺炎等別の症状との合併が多く、菌血症のみの発症は1例であった。予防接種歴は、有りが13例で全例10歳未満、無しは26例、不明36例で、推定感染地域は全例が国内であった。

13) 水痘(入院例)

9月から届出対象となった水痘(入院例)は3例の届出があり、性年齢階級別では10歳代女、50歳代男、70歳代女の各1例であった。診断方法は、いずれも血清IgM抗体の検出であった。推定感染経路は、水痘患者との接触、帯状疱疹患者との接触が各1例、不明が1例であった。

14) 梅毒

梅毒は、男39例、女12例の計51例の届出があり、前年の39例より増加した。性年齢階級別では、男が20歳代から70歳代に分布し、20歳代12例が最も多く、次いで50歳代9例の順であった。女は20歳代が5例、次いで30歳

代, 40歳代が各2例の順であった。病型別では, 無症状病原体保有者が13例, 早期顕症梅毒が36例, 晩期顕症梅毒が2例であった。推定感染経路は性行為感染が44例, 不明7例で, 性行為感染の内訳は, 異性間が29例, 同性間が7例, 異性・同性不明が8例であった。また, 推定感染地域は国内が49例, 国外が2例であった。

15) 播種性クリプトコックス症

9月から届出対象となった播種性クリプトコックス症は, 10月と12月に男各2例, 計4例の届出があった。年齢階級別では, 60歳代2例, 70歳代と80歳代が各1例であった。診断方法はいずれも通常無菌的部位(血液)からの分離同定とラテックス凝集による荚膜抗原の検出による病原体の検出であった。免疫不全を来す基礎疾患又は症状は, 胃・膵全摘による栄養吸収障害, ステロイド内服及び糖尿, MALTリンパ腫が各1例であったが, 12月の1例は鳥類(ハト)の糞便との接触が疑われた。

16) 破傷風

破傷風は, 男2例, 女3例の計5例の届出があり, 前年の4例より増加した。性年齢階級別では, 男が70歳代と80歳代で各1例, 女は60歳代2例, 70歳代1例であった。届出は, 1月, 5月, 6月, 10月, 11月から各1例, 診断方法はいずれも臨床決定であった。創傷部位は上肢3例, 下肢1例, 不明1例であった。また, 推定感染地域は全例が国内であった。

17) バンコマイシン耐性腸球菌(VRE)感染症

バンコマイシン耐性腸球菌感染症は, 男4例, 女2例の計6例の届出があった。性年齢階級別では, 男が60歳代1例, 70歳代2例, 80歳代1例, 女は60歳代, 80歳代が各1例であった。診断方法は, 全例が分離同定による病原体の検出で, MIC(Minimum inhibitory concentration)測定が行われていた。推定感染地域は全例が国内であった。

18) 風しん

風しんは, 男6例, 女3例の計9例の届出があり, 前年の608例より大きく減少した。病型別では, 検査診断例8例, 臨床診断例1例であった。予防接種歴は, 有り2例, 無し2例, 不明5例で, 接種有りのうち2回接種は1例であった。推定感染地域はいずれも国内であった。

19) 麻疹

麻疹は, 男13例, 女14例の計27例の届出があり, 前年の26例より増加した。届出は年当初から第16週(4/16~22)までが多く, その後は散発的となった。性年齢階級別では, 男の20歳未満では, 1~4歳が3例, 15~19歳が2例, 1歳未満, 5~9歳が各1例で, 20歳以上では20歳代から40歳代に分布していた。女では, 20歳未満では1歳未満が4例, 1~4歳が3例, 10~14歳が2例で, 5~9歳,

15~19歳各1例で, 20歳以上では20歳代から30歳代に分布していた。病型別では, 検査診断例20例, 臨床診断例5例, 修飾麻しん2例で, 修飾麻しんの検査方法は, 検体から直接のPCR法による病原体遺伝子の検出, 血清IgM抗体の検出が各1例であった。また, 予防接種の接種歴では, 接種歴有り4例, 無し17例, 不明6例で, 予防接種有りのうち2回接種は1例で病型は臨床診断例であった。推定感染地域は国外7例, 国内20例であった。

20) 薬剤耐性アシネトバクター感染症

基幹定点報告対象疾患から9月に全数把握対象疾患へ移行された薬剤耐性アシネトバクター感染症は, 40歳代と60歳代の男各1例, 計2例の届出があった。診断方法は通常無菌的部位からの分離同定による病原体の検出で, 推定感染経路は不明であった。

(4) 獣医師が届出を行う感染症

獣医師が届出を行うエボラ出血熱(サル), 重症急性呼吸器症候群(イタチアナグマ・タヌキ・ハクビシン), ペスト(プレーリードッグ), マールブルグ病(サル), 細菌性赤痢(サル), ウェストナイル熱(鳥類), エキノコックス症(犬), 結核(サル), 鳥インフルエンザH5N1又はH7N9(鳥類), 中東呼吸器症候群(ヒトコブラクダ)及び新型インフルエンザ等感染症(鳥類)の11疾患の届出はなかった。

2. 定点把握対象疾患の動向

五類感染症定点把握対象疾患の週単位報告の週別報告数, 定点当たり報告数を表3-1, 2に示した。また, 月単位報告の月別報告数, 定点当たり報告数を表4に, 性年齢階級別報告数を表5に示した。

(1) 内科・小児科定点把握対象疾患の動向

1) インフルエンザ

2014年第1週~52週の累積報告患者総数は111,443例, 定点当たり報告総数は458.61で前年と比べ大きく増加した。前年末の流行を引き継ぎ, 年当初から報告数の増加が始まり, 前年より1週遅い第5週(1/27~2/2)に定点当たり47.87を観察した以後減少に転じた。また, 年末は前年より2週早い第47週(11/17~23)に定点当たり1.82を観察し, 流行が始まった。第52週には定点当たり48.13(2014年最大値)まで増加した。

(2) 小児科定点把握対象疾患の動向

1) RSウイルス感染症

2014年第1週~52週の累積報告患者数は4,070例, 定点当たり報告患者総数は26.26で, 前年を上回った。年始冬期の流行は, 第1週(12/30~1/5)をピークに下降した。報告数は第35週(8/25~31)以降増加し始め, 第50週(12/8~14)には定点当たり報告数の最大値2.71を観察した。年末冬期の流行は, 前年までの同時期よりかなり多い状況が

～31)、第36週(9/1～7)の定点当たり0.03であった。

10) ヘルパンギーナ

2014年第1週～52週の累積報告患者数は7,992例、定点当たり報告患者総数51.56は前年を大きく上回った。6月中旬～9月中旬にかけて一峰性のピークを示し、定点当たり報告数の最大値は第29週(7/14～20)の定点当たり7.09であった。

11) 流行性耳下腺炎

2014年第1週～52週の累積報告患者数は2,598例、定点当たり報告患者総数16.76は前年を上回った。年間を通して際立った報告数の増加は認められなかった。定点当たり報告数の最大値は、第29週(7/14～20)の定点当たり0.54であった。

(3)眼科定点把握対象疾患の動向

1) 急性出血性結膜炎

2014年第1週～52週の累積報告患者数は58例、定点当たり報告患者総数1.41は前年を下回った。年間を通して報告があり、定点当たり報告数の最大値は第13週(3/24～30)、第37週(9/8～14)の定点当たり0.10であった。

2) 流行性角結膜炎

2014年第1週～52週の累積報告患者数は800例、定点当たり報告患者総数19.51は前年を下回った。年間を通して報告があり、定点当たり報告数の最大値は、第32週(8/4～10)の定点当たり0.84であった。

(4)基幹定点把握対象疾患の動向

1) 細菌性髄膜炎

2014年第1週～52週の累積報告患者数は8例、定点当たり報告患者総数0.80は前年を上回った。報告は散発的で、定点当たり報告数の最大値は第49週(12/1～7)の0.20であった。

2) 無菌性髄膜炎

2014年第1週～52週の累積報告患者数は34例、定点当たり報告患者総数3.40で、前年を下回った。年間を通して報告があり、際立った流行は観察されなかった。

3) マイコプラズマ肺炎

2014年の第1週～52週の累積報告患者数は178例、定点当たり報告患者総数17.80は前年を下回った。年間を通して報告があり、際立った報告数の増加は認められなかった。定点当たり報告数の最大値は、第6週(2/3～9)の定点当たり1.40であった。

4) クラミジア肺炎(オウム病を除く)

2014年第1週～52週の累積報告患者数は23例、定点当たり報告患者総数2.30は前年を下回った。患者の報告は年間を通して散発的であった。

5) 感染性胃腸炎(ロタウイルス)

2013年第42週から基幹定点報告対象に加わり、2014年第1週～52週の累積報告患者数は62例、定点当たり報告患者総数6.20であった。散発的な患者報告が前年末から続いたのち、3月～5月にかけて定点当たり報告数の多い状況が続いた。定点当たり報告数の最大値は、第17週(4/21～27)、第19週(5/5～11)の0.70であった。年齢階級別では、1～4歳が最も多く、10歳未満が全体の95.2%を占めた。

6) インフルエンザ(入院)

2014年第1週～52週の累積報告患者数は238例、定点当たり報告患者総数23.80は前年を上回った。定点当たり報告数の最大値は内科・小児科定点報告インフルエンザと同時期の第5週(1/27～2/2)の定点当たり2.90であった。年齢階級別では、70歳以上が全体の32.8%、10歳未満は42.4%であった。

7) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)感染症

2014年1月～12月の累積報告患者数は105例、定点当たり報告患者総数10.50は前年を下回った。年間を通して報告はあったが、5月～9月にかけては過去5年間の同時期と比べ最も低い水準で推移した。定点当たり報告数の最大値は4月の定点当たり1.50であった。年齢階級別では、男女とも70歳以上が多かった。

8) ペニシリン耐性肺炎球菌(PRSP)感染症

2014年1月～12月の累積報告患者数は10例、定点当

表4 定点対象疾患の推移(基幹定点・性感染症定点 月単位報告)

月別	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症		ペニシリン耐性肺炎球菌感染症		薬剤耐性アシネトバクター感染症		薬剤耐性緑膿菌感染症		性器クラミジア感染症		性器ヘルペスウイルス感染症		尖圭コンジローマ		淋菌感染症	
	報告数	定点当たり報告数	報告数	定点当たり報告数	報告数	定点当たり報告数	報告数	定点当たり報告数	報告数	定点当たり報告数	報告数	定点当たり報告数	報告数	定点当たり報告数	報告数	定点当たり報告数
1月	11	1.10	3	0.30	-	-	-	-	119	2.16	43	0.78	31	0.56	66	1.20
2月	9	0.90	1	0.10	-	-	-	-	125	2.23	41	0.73	25	0.45	52	0.93
3月	11	1.10	-	-	-	-	-	-	126	2.25	41	0.73	32	0.57	51	0.91
4月	15	1.50	2	0.20	-	-	-	-	131	2.38	43	0.78	32	0.58	51	0.93
5月	3	0.30	1	0.10	-	-	-	-	127	2.27	45	0.80	21	0.38	47	0.84
6月	5	0.50	1	0.10	-	-	-	-	120	2.11	43	0.75	30	0.53	55	0.96
7月	7	0.70	-	-	-	-	1	0.10	155	2.72	41	0.72	32	0.56	51	0.89
8月	9	0.90	-	-	-	-	-	-	121	2.12	48	0.84	31	0.54	53	0.93
9月	4	0.40	1	0.10	-	-	-	-	153	2.68	46	0.81	24	0.42	68	1.19
10月	11	1.10	1	0.10	-	-	-	-	139	2.57	33	0.61	23	0.43	44	0.81
11月	9	0.90	-	-	-	-	-	-	137	2.40	31	0.54	42	0.74	38	0.67
12月	11	1.10	-	-	-	-	-	-	113	2.02	44	0.79	15	0.27	53	0.95
合計	105	10.50	10	1.00	-	-	1.00	0.10	1,566	27.96	499	8.91	338	6.04	629	11.23

(-:0)

り報告患者総数 1.00 は前年と同水準であった。報告は 1 月に 3 例, 4 月に 2 例, 2 月, 5 月, 6 月, 9 月, 10 月に各 1 例であった。年齢階級別では, 70 歳以上が 5 例であった。

9) 薬剤耐性アシネトバクター(DRAB)感染症

2011 年 2 月から基幹定点報告対象疾患に加わったが, 感染症法施行規則の一部改正により, 2014 年 9 月 19 日から全数把握対象疾患に移行した。埼玉県では基幹定点報告対象期間中の報告はなかった。

10) 薬剤耐性緑膿菌(DRPA)感染症

2014 年の報告患者は 7 月の 70 歳以上の男 1 例で, 定点当たり報告総数 0.10 は前年を下回った。

(5) 性感染症定点把握対象疾患の動向

1) 性器クラミジア感染症

2014 年 1 月~12 月の累積報告患者数は, 男 701 例, 女 865 例の計 1,566 例で, 定点当たり報告患者総数 27.96 は前年を下回った。定点当たり報告数の最大値は 7 月の定点当たり 2.72 であった。年齢階級別では, 男 25~29 歳, 女 20~24 歳が最も多かった。

2) 性器ヘルペスウイルス感染症

2014 年 1 月~12 月の累積報告患者数は, 男性 147 例, 女性 352 例の計 499 例, 定点当たり報告患者総数 8.91 は前年を下回った。定点当たり報告数の最大値は 8 月の定点当たり 0.84 であった。年齢階級別では, 男は 30~34 歳と 35~39 歳が最も多く, 女では 25~29 歳が最も多かった。

3) 尖圭コンジローマ

2014 年 1 月~12 月の累積報告患者数は男性 144 例, 女性 194 例の計 338 例, 定点当たり報告患者総数 6.04 は前年を下回った。定点当たり報告数の最大値は 11 月の定点当たり 0.74 で, 過去 5 年間の最大値を記録した。年齢階級別では, 男 30~34 歳, 女 35~39 歳が最も多かった。

4) 淋菌感染症

2014 年 1 月~12 月の累積報告患者数は男 531 例, 女 98 例の計 629 例, 定点当たり報告患者総数 11.23 は前年を上回った。定点当たり報告数の最大値は 1 月の定点当たり 1.20 であった。年齢階級別では, 男女とも 20~24 歳が最も多かった。

(6) 感染症法第 14 条 1 項に規定する厚生労働省で定める疑似症

2014 年埼玉県における摂氏 38 度以上の発熱及び呼吸器症状(明らかな外傷又は器質的疾患に起因するものを除く)と発熱及び発しん又は水疱(ただし, 当該疑似症が二類感染症, 三類感染症, 四類感染症又は五類感染症の患者の症状であることが明らかな場合を除く)の二つの症候群の届出はなかった。

まとめ

2014 年の感染症発生動向調査に基づく患者届出について, 各疾患の動向をまとめた。二類感染症は, 結核1,390 例の届出があり, 前年より増加した。

三類感染症は細菌性赤痢2 例, 腸管出血性大腸菌感染症 265 例, 腸チフス2 例, パラチフス1 例の届出があった。そのうち腸管出血性大腸菌感染症は前年より増加した。

四類感染症は, E 型肝炎, A 型肝炎, つつが虫病, デング熱, ブルセラ症, マラリア, ライム病, レジオネラ症の計 8 疾患の届出があり, 前年の各疾患の届出数を上回った。

五類感染症の全数把握対象疾患は, アメーバ赤痢, ウイルス性肝炎(E 型・A 型を除く), カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症, 急性脳炎, クリプトスポリジウム症, CJD, 劇症型溶血性レンサ球菌感染症, AIDS, ジアルジア症, 侵襲性インフルエンザ菌感染症, 侵襲性髄膜炎菌感染症, 侵襲性肺炎球菌感染症, 水痘(入院例), 梅毒, 播種性クリプトコックス症, 破傷風, バンコマイシン耐性腸球菌感染症, 風しん, 麻しん, 薬剤耐性アシネトバクター感染症の計 20 疾患の届出があった。そのうち新たに届出対象疾患に加わった 4 疾患を除くアメーバ赤痢, ウイルス性肝炎(E 型・A 型を除く), クリプトスポリジウム症, 劇症型溶血性レンサ球菌感染症, AIDS, 侵襲性インフルエンザ菌感染症, 侵襲

表5 性年齢階級別報告数(基幹定点・性感染症定点 月単位報告)

年齢	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症		ペニシリン耐性肺炎球菌感染症		薬剤耐性アシネトバクター感染症		薬剤耐性緑膿菌感染症		性器クラミジア感染症		性器ヘルペスウイルス感染症		尖圭コンジローマ		淋菌感染症	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
0歳	3	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1-4	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
5-9	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
10-14	1	1	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	1	-	-	2
15-19	2	1	-	-	-	-	-	-	49	112	5	24	3	12	44	17
20-24	-	-	-	-	-	-	-	-	120	283	16	41	23	34	104	32
25-29	-	1	-	-	-	-	-	-	144	191	17	53	22	37	82	15
30-34	-	-	1	-	-	-	-	-	121	136	23	51	28	33	96	11
35-39	1	1	-	-	-	-	-	-	99	76	23	47	16	40	66	12
40-44	-	1	1	-	-	-	-	-	68	35	15	26	21	21	58	5
45-49	1	-	-	-	-	-	-	-	48	15	15	23	14	6	42	1
50-54	4	-	-	-	-	-	-	-	26	10	11	20	9	1	17	-
55-59	2	2	1	-	-	-	-	-	13	2	7	14	2	7	14	3
60-64	4	2	-	-	-	-	-	-	9	1	5	16	3	-	3	-
65-69	9	2	1	-	-	-	-	-	3	-	5	12	2	-	4	-
70~	43	18	4	1	-	-	-	-	1	-	5	24	-	3	1	-
合計	72	33	9	1	-	-	1	-	701	865	147	352	144	194	531	98
男女比	2.2	1.0	9.0	1.0	-	-	-	-	0.8	1.0	0.4	1.0	0.7	1.0	5.4	1.0

(-:0)

性髄膜炎菌感染症, 侵襲性肺炎球菌感染症, 梅毒, 破傷風及び麻しんの11疾患は前年より増加した。

週単位報告対象疾患では, インフルエンザは, 前年末に引き続き年当初から増加が始まり第5週をピークに減少に転じたが, 前年と比べ大きな流行年となった。また, 年末冬期の流行は前年より早い11月から始まり, 第52週には第5週を上回る定点当たり48.13を観察した。

小児科定点報告対象疾患では, RSウイルス感染症は, 前年末に引き続いた流行が年当初から下降しながら3月まで続いた。また, 年後半の流行は8月から始まった。第50週に記録した定点あたり報告数の最大値は過去5年間で最も高く, 前年までの同時期よりかなり多い状況が年末まで続いた。

咽頭結膜熱は, 夏期に報告数の増加が認められ第25週に最大値を記録した後, 報告数は緩やかに減少し, 前年と比べ小規模な流行年となった。また, 11月に入り報告数の増加が認められ, 報告数の多い状況は年末まで続いた。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は, 8月の報告数が最も少なく, 前年までと同様の推移を示した。また, 前年と同様に大規模な流行年となった。

感染性胃腸炎は, 前年末からの流行は1月まで続いた。年末冬期の流行は10月から始まり, 過去5年のピークと比べると2009年に次いで低く, 小規模な流行年となった。

水痘は, 年間を通して前年までと同様の推移を示したが, 冬期の流行は過去5年間で最も少なくやや小規模な流行年となった。

手足口病は, 7月~10月にかけて緩やかな報告数の増加が認められた。夏期のピークは過去5年間では最も低く, 小規模な流行年となった。

伝染性紅斑は, 6月~7月にかけて報告数の増加が認められ, 10月以降に再び緩やかな増加が始まった。小規模な流行年ではあったが, 前年に比べ報告患者数は増加した。

突発性発しんは, 前年までと同様に明らかな季節変動は認められなかった。経年的な緩やかな減少傾向が前年に引き続き観察された。

百日咳は, 年間を通して散発的な報告で, 際立った流行は観察されず, 前年同様にやや小規模な流行年となった。

ヘルパンギーナは, 前年までと同様に夏期に一峰性の流行を認め, 流行のピークは前年より高く, 流行の終息も前年より遅かった。

流行性耳下腺炎は, 年間を通して際立った増加を認めなかった。前年と同様に小規模な流行年となった。

眼科定点報告対象疾患では, 急性出血性結膜炎は, 前年と同様に報告は年間を通してあったが際立った流行は認めなかった。定点あたり報告患者総数は前年より減少した。

流行性角結膜炎は, 年間を通して報告はあったものの前年同時期を上回ることはいくつか前年より小規模な流行年となった。

基幹定点報告対象疾患では, 細菌性髄膜炎は, 8例の報告があり, 前年の2例より増加した。散発的な報告で, 患

者の集積は認められなかった。

無菌性髄膜炎は, 34例の報告があり, 前年の45例より減少した。年間を通して報告があったが, 際立った流行は観察されなかった。

マイコプラズマ肺炎は, 178例の報告があり, 前年の443例より減少した。年間を通して報告数は同水準で推移し, 2012年以降の減少傾向はゆるやかとなった。

クラミジア肺炎は, 23例の報告があり, 前年の39例より減少した。報告は年間を通して散発的で際立った流行は認められなかった。

感染性胃腸炎(ロタウイルス)は, 2013年第42週(10/14~20)から報告対象に追加され, 2014年は62例の報告があった。定点あたり報告数の多い状況が3月~5月にかけて観察された。

インフルエンザ(入院患者)は, 238例の報告があり, 前年の165例より増加した。年始及び年末冬期の増加は, 内科・小児科定点把握のインフルエンザ報告数と同様の動きを示した。

月報報告対象疾患では, メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症は, 105例の報告があり, 前年の122例よりやや減少した。際立った報告患者数の増加は認められなかった。

ペニシリン耐性肺炎球菌感染症は, 10例の報告があり, 前年と同数であった。報告は散発的で, 年間を通して全国より低い水準で推移した。

薬剤耐性アシネトバクター感染症は, 感染症法施行規則の一部改正により2014年9月19日から全数把握対象疾患に移行した。移行前の報告はなかった。

薬剤耐性緑膿菌感染症は, 1例の報告があり前年の3例より減少した。

性感染症定点把握対象疾患では, 性器クラミジア感染症は, 1,566例の報告があり, 前年の1,620例より減少した。男女比は0.8:1であった。

性器ヘルペスウイルス感染症は, 499例の報告があり, 前年の536例より減少した。男女比は0.4:1であった。

尖圭コンジローマは, 338例の報告があり, 前年の354例よりやや減少した。男女比は0.7:1であった。

淋菌感染症は, 629例の報告があり, 前年の607例より増加した。男女比は5.4:1であった。